本誌通巻第400号の巻頭言

主幹 朝比奈泰彦

本誌は大正5年故牧野富太郎博士の創刊以来幾多の迂余曲折を経て先代津村重舎君の後援により毎月 64 頁を確保し植物学雑誌の別働隊として活躍しつつあったが太平洋戦争の破局的終末と共に一時停頓の悲運に遭遇した。然るに我邦生薬資源の育成と植物分類学の進歩に対し先代に勝るも劣らざる関心を有せらるる当主津村重舎君の絶大の厚意により毎月 32 頁の冊子として復興し戦前にも劣らざる学術発表機関としての役目を遂行し得たことは我邦学界が津村重舎君に対し感謝措く能わざる所である。今や本誌は本号を以て通巻400号に達したのを機会に2倍の頁数で之を編輯し停滞せる寄稿論文の一部を一掃し尚今後半年毎に一回同様の処置を施して機敏なる報文の発表に寄与せんと考慮しつつある。此の操作に関聯して雑誌の定価及び投稿者の資格等に僅少なる改正を加うるの已むを得ざるに至ったが幸に寄稿者諸君の御賛同を得て益々優秀なる論文有益なる記事に富む雑誌として学界に寄与したいと念願して居る。

梅崎 勇*: ウミゾウメンの生殖器官の発達について

Isamu Umezaki*: On the development of the reproductive organs in *Nemalion vermiculare* Suringar

本邦における紅藻類ウミゾウメン (*Nemalion vermiculare* Suringar) の生殖器官については，岡村先生 (1916) は日本藻類図譜の中において，詳細に図解されている。また，森氏 (1948) は北海道函館産の材料で，その発達過程を研究され，その結果は，Kylin (1916) によって研究された欧州産のツクモノリ (*N. multifidum* (Weber & Mohr) J. Ag.) のそれと同じであると報告されている。しかし岡村先生は，その研究において，受精後の造果器の第一分割面の方向については，説明されておらない。また，森氏は造果枝細胞が後に融合細胞に発達するかどうかについて，図解もまた説明もされていない。さらに両氏共，精子器の発達経過については観察されていない。

* 京都大学農学部水産学教室. Department of Fisheries, Faculty of Agriculture, Kyoto University, Maizuru, Japan.